

巻頭言

山梨県立中央病院放射線治療科

萬利乃 寛

山梨の肺癌放射線治療新時代に向けて

2012年を振り返ると、期待を背負って誕生した民主党政権の終焉、尖閣諸島・竹島問題をきっかけにした対中韓関係悪化、史上最高の円高による経済停滞など、国民にとって不安な話題が多かったように感じます。一方で東京スカイツリーの開業、オリンピックでの日本選手の活躍、京都大学山中教授のノーベル賞受賞など明るい心躍る話題もありました。来年は更に明るい1年になることを願ってやみません。

さて本会は今回で第42回を迎え、本誌も第26巻の発刊となりました。今回は世話人の中で最も若輩者の小生が当番世話人を務めさせていただきました。誠に勝手な解釈ですが小生および山梨県で肺癌診療に携わる若い医療者への更なる奮起を促されたものと理解し、同世代の仲間とともに諸先輩方からのバトンをつなぎ更に本会を発展させて参るべく気持ちを新たにしました次第です。

今回のテーマは“肺癌の放射線治療”といたしました。小生からの後輩医師への恫喝の効果もあり、一般演題は放射線治療に関する演題が3題、内科・外科の演題が計6題、全部で9題の御発表があり盛会でした。

特別講演では獨協大学放射線科の村上昌雄先生に“肺癌に対する粒子線治療”というテーマで御講演をいただきました。長年に渡り粒子線治療分野で御活躍されており、本邦での粒子線治療の第一人者と言える村上先生ならではの、基礎から最先端の話題にいたるまで大変わかりやすい御講演でした。例えば山梨県には粒子線治療施設がなく、なかなか縁遠い治療ですが、以前に比べて患者様のニーズ、リクエストも増加し、来年から近隣の相澤病院(松本)に陽子線治療が設置される状況にあつて、我々も不勉強では済まされない状況になってきているのではないかと存じます。小生をはじめ会員の皆様方の理解を深める良い機会であつたと確信しております。

高精度放射線治療の普及に伴い、昨今の放射線治療はますます複雑化してきておりますが、粒子線治療のみならず、放射線治療の正しい啓蒙・発展、ひいては山梨県全体における肺癌診療の向上のためこれからも皆様と共に全力を捧げて参りたいと思う所存です。